



創業85年の池田紙店を守る、3代目の池田英実さん

和の魅力を提案

店内に入ると4畳ほどの和室を再現したスペースがあり、カラフルな障子やふすまを展示している。「今は破れにくい障子紙や面白いデザインのふすま紙があるんですよ」と案内する代表の池田英実さん(57)。フーリングの床が主流になり、和室を持たない家が増える中、ふすまや障子の魅力を発信したいと昨年、店の一角に展示スペースを設けた。「和の良さを見直してほしい」と話す池田さん。日本伝統の紙文化に目を向けてもらおうと奮闘している。

激動の中で新たな挑戦

創業は1934(昭和9)年。池田さんの妻・由美子さんの祖父(故人)が、絵師や表具師を相手に和紙や表装材料を販売したのが始まりだ。戦後は住宅の建設ラッシュで、商品はすふま紙や障子紙が中心になった。「2代目である父の時代は、商品が飛ぶように売れて倉庫の中は品薄の状態でした」と子どもの頃

町の紙屋さん

[有限会社 池田紙店] 秋田市大町1丁目5-30 TEL.018-862-4617

秋田市の通町近く。池田紙店は、ふすま紙、障子紙、掛け軸などの表装材料を主に扱う卸売り店。職人や業者への販売のほか、一般への小売りを行う。奥の倉庫には、ふすま紙だけでも700種類以上の在庫をそろえる。



を振り返る由美子さん。

やがて住宅事情が変わり、ふすま紙、障子紙、表装材料の需要は激減。職人も減った。「このままでは商売が尻すぼみになる一方。何か手を打たないと」。そう案じていた2011(平成23)年。3月に東日本大震災が発生し、5月には2代目が病で急逝。混乱の中で池田さん

は3代目の代表になった。

次の一手として12年に始めたのが竿燈の提灯作りだ。提灯を作っている職人が「やってみたら」と技を授けてくれた。竿燈の差し手でもある池田さん、祭りで得た感覚、日々何百もの紙製品を扱う紙屋の知識を生かし、軽くて丈夫な提灯を作り続けている。紙屋の提灯は、初年

文化や技を守りたい

度、注文数100以下だったが、今年は5倍以上に。池田さんは「おかげさまで忙しくなつて竿燈の練習になかなか行けない」とうれしい悲鳴を上げる。

普段、事務や接客を担当する由美子さんは、絵を描くことが好きなことから、半年ほど前にイラスト入りの提灯づくりを始めた。外国人向けの土産品として日本の縁起物を描いた招き猫や大黒様その他、ペットの犬の姿を描いた提灯や、ギターの

先生の還暦祝いとしてギターのイラスト入り提灯を制作。お客様や贈った先に好評だった。「一つ仕上げるのに時間がかかり、まだ試行錯誤の段階」と控え目に話す由美子さんだが、「障子やふすま同様、日本伝統の紙文化に興味を持ってもらえなきゃいけない」と笑顔を見せる。

新たな挑戦の一方、表具や建具の職人との付き合いは変わらず大切になっている。中には初代の頃から付き合いのあるベテラン職人も。時代が大きく変わる中、紙文化や職人の手仕事の技を守るため、和の魅力を伝える続ける。